慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	序
Sub Title	
Author	山田, 辰雄(Yamada, Tatsuo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1998
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.71, No.1 (1998. 1) ,p.5- 8
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小田英郎教授退職記念号
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19980128-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

序

このような序文を個人的関係をもって始めるのは異例ではあるが、小田英郎教授と私との関係を振り返るとき、敢えてそうすることをお許しいただきたいと思う。先生という言葉が単なる敬称ではなく、先に生まれた先導者という本来の意味で使うとすれば、小田英郎教授はまさに私の先生である。私は、一九六五年に法学部助手に採用されて以来今日に到るまで、石川忠雄研究会の先輩であり、そして法学部政治学科、特に地域研究グループの先輩である、小田英郎先生と親しく接してきている。研究者として、また教育者として自らの成長の過程を振り返るとき、重要な場面でいつも小田先生との出会いがあった。想い出は尽きないが、思いつくままに綴ってみよう。

人はそれぞれの道を選ぶとき迷いがないと言えば嘘になる。私も例外ではなかった。大学の助手に残るかどうかは運も手伝う。採用するかどうかは大学が決めることであるが、採用される側からすると、自分が将来研究者としてやっていけるのかどうかなどの不安を抱くことになる。このような私に、身近にあって心構えを教えてもらったのは小田先生であった。

巻末にある小田先生の多くの翻訳の仕事のなかで、石川忠雄先生と共訳された二冊の本がある。ベンジャミン・I・シュウォルツ『中国共産党史――中国共産主義と毛沢東の台頭』とフレデリック・ノサール『発信地――北京』がそれである。翻訳の正確を期するために必ず「読みあわせ」の作業があった。私が訳文を読み、翻訳者が

英文を見ながらそれを確認するのである。この過程を通して私は英文はいうまでもなく、日本語についても多くのことを学んだ。小田先生と私は当時西武池袋線沿線に住んでいた関係上、この作業の多くを小田先生のお宅ですることになった。仕事が終わったのちに、小田夫人がいつも用意してくださった心尽くしの夕食が今でも忘れられない。

生田正輝、十時厳周学部長時代には法学部の入学試験改革が重要な課題であった。現行の制度は十時学部長時代に生まれたものであるが、旧制度の改革には大きな抵抗がなかったわけではない。小田先生はこのような抵抗に抗して果敢に闘い、私もその後ろに従った。それは、今日の法学部の地位を築くための重要な転換点であった。

小田先生は、慶應義塾創設一二五周年に際して設立された地域研究センターの準備段階から関わり、五年余にわたって所長を務められた。私はその下で副所長として働かせていただいた。今日の地域研究センターの基礎はすべてこの時代に築かれたといってよい。そこには、限られた予算のなかで、いかにして既存の研究所とは違った成果を出すかという課題があった。その回答は、本を買わない、紀要を出さない、専任者を雇わないという「三ない主義」の方針のもとに、塾内外の研究者の参加を得て学際的研究のためのネットワークを作り、その上に研究成果を出すことであった。この試みは、今日の時点において見事に成功していると言える。

少し長くなったが、つぎに小田英郎先生の学問に目を転じることにしよう。小田先生は日本における本格的なアフリカ政治研究の開拓者であり、その地位は今日に到るも変わっていない。第一世代の研究者が直面するのは、まず問題を確定し、しかる後に分析をするという困難な作業である。それには、すでに研究業績のある分野に比べると、一層の努力と学問的感覚が必要とされる。この困難を克服されて小田先生は今日の研究上の地位を確立された。

小田先生のアフリカ政治研究は、パン・アフリカニズム、国民国家建設、南アフリカ共和国ならびに南部アフ

リカ地域の諸問題、アフリカ統一機構やアフリカの地域紛争、中部アフリカ地域の現代史、冷戦終結後のアフリカ諸国の民主化などの問題に及び、それぞれの分野で学界に残る業績をあげられた。

小田先生の文章は明快である。そこには、研究分野の異なる者をも納得させるだけの説得力と深さがある。私は特に、最初の著書である『現代アフリカの政治とイデオロギー』に感銘し、影響を受けた。当時の時代的風潮のなかで、社会主義は重要な問題であった。中国研究者としての私は、この言葉をマルクス・レーニン主義の枠組みのなかで理解しようとしていたが、小田先生は常にアフリカ社会主義の現状を踏まえてそのような捉え方の限界を指摘された。このことは、既存の理論的枠組みによって特定の地域を見ることの危うさを示唆するとともに、地域政治研究が政治学の理論構築に寄与する可能性をも示しているといえる。ここで学んだことは、今日でも私の中国研究の根底にある。

小田英郎先生の学問のいま一つの特徴は、第三世界全体を視野に入れたその幅の広さである。それは、一面では先生の思考の柔軟さに起因するとともに、他面では内山正熊先生や石川忠雄先生のもとで国際政治学と中国政治を学ばれたこと、および世界経済調査会で調査に携わってこられたことに起因するのかもしれない。この経験は比較政治の分野で生かされている。一九八八年に編集された『第三世界の政治――比較地域政治論』は、放送大学の教科書として出版されたものであるが、そこで示された枠組みは平易ではあるが最もオーソドックスなものとして、私は今日でも座右において利用させていただいている。私のような中国研究者の立場からすると、小田先生がかつて一九六一年に発表された「新疆をめぐる中ソ関係――盛世才の時期を中心として」という論文は、今日でもこの分野における研究の参照文献になっていることを記しておきたい。

小田先生の研究会は常に多くの学生を擁し、各界に人材を送り出すとともに、優れた研究者を輩出した。小田先生は法学部の重要な職務をほぼ歴任されたが、学部を越えて先に言及した地域研究センター所長をはじめ、体

育会の花形であるアメリカン・フットボール部ならびに野球部の部長を務められた。

学外にあって小田先生は、長年にわたり日本アフリカ学会、日本国際政治学会など、多くの学会の理事を務められたが、一九九六年以来日本アフリカ学会会長として学界にあって指導的立場にある。また、アフリカ研究の延長線上で、アフリカ基金運営委員、アフリカ支援基金運営委員として、さらに野球部長との関連で東京六大学野球連盟理事長、全日本大学野球連盟副会長など多くの仕事に携わり、今日に及んでいる。

小田英郎先生は、一九九七年三月に選択定年制により慶應義塾を退職され、四月から敬愛大学国際学部学部長に就任された。お元気で退職されることは誠に喜ばしいことであるが、去られることに対する私どもの淋しさもおおい隠すことができない。特に小田先生は最も身近な先輩であったが故に、私はその感を深くしている。しかし、すでに赴任された敬愛大学国際学部の研究と教育は先生のこれまでの経験と蓄積と直接かかわりがある、と聞いている。新しい環境のなかで、小田先生がこれまでの研究をさらに発展させられることを、私は願ってやまない。

一九九八年一月

法学部長　山田辰雄